A magazine all about the ULTRA FACTORY vol.13 issue 2021









Everyone was so serious and hard-working (laugh). (SANDWICH)



相性かな…根性です。温室管ちを目覚するてらい甘やかされて育ったので、 厳しい環境でう言がいや共同生活をすることが辛かったです。 山道や岩場を練り去て根では今くころきました。注川テクシッカアシ

Guts... Since my up-bringing was sheltered and spoiled, it was hard to collect garbage in harsh environments and live with others. I gained the guts to march along mountain roads and rocky stretches. (Yodogawa Technique PJ)



I learned the importance of learning by experience. I thought I shouldn't dislike something without trying it and decided to actively try something that interests me (Yamamoto Taro PJ)



感じた学生は

7





Since I've always liked bands, I was really excited that a member of Volleyboys joined as a designer. (BYEDIT)



Face-to-face! Online, you don't feel like you've made friends and it's hard to get close to each other. Also, eventually only those who speak (or speak well on screen) appear, so I feel like not participating. (Yodogawa Technique PJ)

I respect that. (Yodogawa Technique PJ)

話しやすいところ。SANDWICH

I liked how he was easy to talk with. (SANDWICH)



THE ULTRA 13 | Published on March 2022 | Published by ULTRA FACTORY, KYOTO UNIVERSITY OF THE ARTS | Editorial direction by Tada Tomomi (MUESUM), Takeuchi Atsushi (Re:S), Edited by BYEDIT (Saimyouji Aimi / Murakami Sara / Funato Ryuko / Masada Yui / Fujita Minori / Mishima Reimi / Ikeyama Miharu / Kawasaki Kirari / Idei Yuuki / Okumura Aoi / Furusawa Kyoko / Kinokawa Yuzuki) | Designed by Nakaie Toshiyuki | Reproduction in whole or in part without permission is prohibited. | 本誌の収録内容の無断転載、複写、引用を禁じます。

THEULTRA

A magazine all about the ULTRA FACTORY vol.13 issue 2021 13

本年、ウルトラファクトリーで行なわれたのは10のプロジェク ト。それぞれのディレクターに4つの質問を投げかけた。

> ヴァーチャル×リアル彫刻プロジェクト ディレクター ヤノベケンジ(美術作家) 参加学生 13人

実現のあり 20年度の活動テーマ | 新たな日常における芸術 かたを試行、実践する機会になるので全力で挑戦しました。具 体的には、デジタル技術(CGモデリング、VR、AR)を活用した 新しい表現形態の模索です。

今年度ならではの工夫 | 地方芸術祭の中止が相次ぐ中、福島 の「福島ビエンナーレ2020」は開催され、私の参加 っていました。私は早々に「一度も白河を訪れずに芸術 祭をつくりあげる」と前代未聞の声明を発表。そこで学生、ビエ ンナーレ実行委員会ともオンラインで話し合いを重ねて、白河 のご当地ヒーロー「ダルライザー」と私の作品の《KOMAINU》 ▶するという映画仕立ての作品アイデアが生まれまし た。デジタルに強い学生が集っていたのでCGで制作、上回生 が下級生に教える形でオンライン上で進めました。白河での 展示はAR彫刻として実現しました。

学生の底力を感じた瞬間 | 3回生の大野裕和くんがティーチ ング・アシスタントとなって、デジタルに強い同級生にも声を かけてチームを編成、プロジェクトを支えてくれました。デジタ の知見が浅い私には力強い存在となりました。大野くんは1 生のときに関わった《サン・チャイルド》の福島設置プロジェ JLO クトが賛否を呼んだことで、芸術と社会のあり方の難しさを痛 感していました。彼自身も今回の福島での発信には覚悟のも と参加したようで、その責任感と強い意志に成長を目の当た にする思いでした。

今年度のプロジェクトから導かれる1冊 | 現実との格闘は継続 中で挙げるのが難しい。しいていえば、この1年間の出来事を 本にしてほしい(笑)。

The Projected Image Laboratory (P-Lab) ディレクター 山城大督(美術家・映像作家)参加学生 9人

20年度の活動テーマ | 自分が専門としている映像メディアを どのように社会で活用していくかということを考えるための プロジェクトです。今年は社会全体で急激なオンライン化が進 み、コミュニケーションの手段を変革しなければならず、それま での対面でのコミュニケーションを映像で補完するということ が起こった1年でもありました。そのように映像メディアがどの ように使われていくかということを学生と一緒に考えながら プロジェクトを行うということをテーマとしました。

今年度ならではの工夫 | 映像編集のやり方、アニメーションを

今年度のプロジェクトから導かれる1冊 | 伊藤亜紗『手の倫 理」。何かのメディアを媒介に、間に挟みながらどれだけコミュ ニケーションをとっても、結局受け取るのは人間の生身である ことを忘れてはいけないということ、そして、映像は補完でし かないことをいっそう感じた本でした。

やなぎみわシアタープロジェクト ディレクター やなぎみわ(演出家・美術作家) 参加学生 8人

シストとその後の作品制作、東京で行う野外劇に関するリサー や舞台制作への参加など、多岐にわたる作家活動に携わる ことを予定していましたが、方向転換を余儀なくされました。

今年度ならではの工夫 | 前期は毎週オンラインで集まって読 書会をし、各自1冊ずつ長編の本を読んで紹介してもらいまし た。その選んだ文学からサイトスペシフィックな作品を展示す るという想定でレポート書いてもらいました。

学生の底力を感じた瞬間 | 感染拡大がすこし緩んだ10月、京 都市南区のTheatreE9に小説家の黒川創さんを招き、私と対 談を行いました。舞台監督の指示のもと、学生たちが客席案 内、会場アナウンス、感染対策まで的確にやってくれました。

今年度のプロジェクトから導かれる1冊 | 「国境」 『暗殺者たち』 といった黒川創さんの著作群。国と国との間に現れ、後に忘れ られた境界の文学を膨大な資料から掬いあげて論じている。 また、ジェイムズ・シャピロ「「リア王」の時代:一六〇六年の クと劇場閉鎖」について、疫病が演劇にもたらした影響を歴史 に学び、未来への展望をのぞくことができます。

ディレクター 矢津吉隆(美術家・kumagusuku代表) ^{参加学生} 14人

20年度の活動テーマ | 副産物産店の活動を通して、学生に とっても身近なアートのゴミ問題を一緒に考えながら、持続可 能な仕組みをつくること。

今年度ならではの工夫 | オンラインでも実際に手を動かしな がら思考できるように、副産物やその加工のための素材を詰 め合わせたキットをつくって配布。その制作手順も動画で共有 することで、学生が取り組みやすいよう工夫しました。

学生の底力を感じた瞬間 | 亀岡の都市のDIYリサーチを通し て、学生の探索視点が深まっていくのを感じたとき。

今年度のプロジェクトから導かれる1冊 | DIYの極地ともいえ る「蟻鱒鳶ル」を建設中の建築家、岡啓輔さんの著書「バベる! 自力でビルを建てる男」。ものをつくることの根源的な意味と ともにその狂気も味わえる本。生きることとつくることについ て考えるきっかけを与えてくれます。

COLORFUL LAB. オンラインプロジェクト ^{ックター} 増田セバスチャン(アーティスト) ^{参加学生} 14人

度の活動テーマ | 次世代がこれが ために、日本発の「KAWAII (カワイ 立するためのプロジェクトとしてス

ABOUT

ULTRA FACTORY(ウルトラファクトリー) | 2008年6月、 技術力、思考力の向上を目的に、類例のない特殊教育を実施 する拠点として京都芸術大学に新設された工房。設立当初は 金属加工および樹脂成形を扱う工房と木材加工を扱う工房の 2つのエリアから始まったが、2017年にシルクスクリーン専 門工房、2018年にデジタルファブリケーションの専門工房が 増設され、現在は4つのエリアからなっている。工房では第一 線で活躍するアーティストやデザイナーを迎えての「ULTRA PROJECT」など、さまざまな実践型プロジェクトを通して、芸 術家の創造と美意識、職人が持つ技術上の熟練と制作に対す る情熱とをあわせ持ち、社会的自覚を持って行動できる人材 の育成を目指す。ウルトラファクトリーは、創造的な思考と研 究の場であり、また実験的な構想を実現する工房として機能 している。

Ultra Factory was established in June 2008 at KYOTO UNIVERSITY OF THE ARTS with the purpose of raising technical and thinking skills, a special education facility found nowhere else. This began with two studios, one for metal processing and resin molding and one for woodwork, but a silkscreen studio was added in 2017, followed by a digital fabrication studio in 2018, now totalling four areas of expertise. In the factory, through various projects such as Ultra Project, which features artists and designers active at the forefront of their fields, students can learn the production and art sense of artists, as well as the passion of artisans to hone their craft. We aim to nurture students who have the ability to take action with social awareness. Ultra Factory is a place to practice creative thinking and research, as well as a studio to realize experimental ideas.

ULTRA FACTORY

つくるためのアプリケーションの習得、配信するための技術な ど、いろんなスキルを身につけてもらいました。

学生の底力を感じた瞬間 | 配信の練習をするために、学生が2 人1組でそれぞれが企画したものをそれぞれが出演者となっ て、22時頃から始まる配信を6日間続けました。その中で脱出 ゲームを行った組があり、脱出できたら配信終了というもの。 20分で終わる予定が3時間くらいかかり、最後は「もういいん じゃない」と言いながら、配信するほうも見るほうもへとへとに なっていました。

今年度ならではの工夫 | 今年はオンラインを中心としたリ 、ディスカッションを行い、最 のあり方にたどり着き、 仮説を立て、展覧会につな

学生の底力を感じた瞬間 | 初めて対面で集まった9月、学生の 中でも「未来への不安」がとても大きいことがわかりました。と 同時に、KAWAII文化のリサーチを通して、世界にいる同世代 の存在と力強さ、クリエイティブを身近に感じ、それが学生へ の刺激になっていました。インターネットでつながった同じカ ルチャーを愛する世界中の人々と意見交換をすることで、未 来をサバイブするヒントが見つけられることに我々も気づか されました。

今年度のプロジェクトから導かれる1冊 | ハンス・ウルリッヒ・ オブリスト編『Mapping It Out: An Alternative Atlas of Contemporary Cartographies』。デジタルトライブにおけ るKAWAII文化の世界地図とは、という着想をもとに読んだ参 考図書です。

MILESTONES

ディレクター 細尾真孝(株式会社細尾代表取締役社長) 参加学生 16人

20年度の活動テーマ | 帯図案のデジタルアーカイブを進め ること。そして、コロナ渦中でできることを考えて、インスタグ ラムを活用した新しいプラットフォームをつくることを目標と しました。

今年度ならではの工夫 | オンラインで各自の企画のプレゼン テーションをしてもらった際には、オンラインならではのブレ ストや進め方ができたので、よいかたちで角度が変わったと 感じました。遠隔での情報共有、コミュニケーションのとり方の 実践になったと思います。

学生の底力を感じた瞬間 | 進行は学生たちの自主性にまかせ ていましたが、自分たちで組織して進めてくれました。アーカ イブの進行はもちろん、インスタグラムについてもアイデアを 出して、ローンチできるところまで進めてくれました。

今年度のプロジェクトから導かれる1冊 | 藤依里子・著、水野恵 司・監修 『恋する和文様』。図案は季節や時代を写して、さまざ まな捉え方ができると知ることができます。図案の意味を知る ことで新しい展開にもつながる参考文献です。

> ニッポン画屛風プロジェクト2020 ^{ディレクター}山本太郎(ニッポン画家) ^{参加学生} 4人

20年度の活動テーマ | プロジェクト内で大型の屏風制作を行 ない、作品を描き、その作品を発表する形まで持っていくこと が目標。

今年度ならではの工夫 | 私の作品はアナログな材料で制作す ることが多く、オンラインでのプロジェクトは私自身にとっても 挑戦となった。そこで工夫したことを以下に箇条書きで。・デジ タルで制作可能なプロジェクトに速やかに変更。前期は茂山 狂言会とニッポン画による「Tシャツデザインプロジェクト」、 後期は茂山逸平との「マスクデザインプロジェクト」に。・キッ クオフはオンラインお茶会を行なうなど、参加しやすい雰囲気 をつくる。・活動定例日を週に1度設けて、オンラインながらも 顔を合わせる機会をつくる。・定例日ごとに小さな目標を設定、 達成できない場合はスケジュールの変更などをメンバー全員 で共有する。

学生の底力を感じた瞬間 | オンラインのプロジェクトながらき ちんと成果を上げることができました。前期はドイツからの留 学生がオンラインで参加していたことも自分にとっては興味 深かった。また、前期のプロジェクトに関連して、茂山狂言会の YouTubeに学生といっしょに出演するという体験も。 ULTRA SANDWICH PROJECT ^{ディレクター} 名和晃平(彫刻家) ^{参加学生} 8人

20年度の活動テーマ | ダミアン・ジャレとコラボした新しいパ フォーマン作品"Planet[wanderer]"のリサーチや実験に参 加することを主な活動目標として設定しました。

今年度ならではの工夫 | 前期は、プランニング、リサーチなど オンラインでできる活動を中心に工夫しながら取り組みまし た。しかし、オンラインでの活動だけでは難しさを感じたため、 後期はSandwichへ来てもらい、スタジオの空気感やさまざま な素材に触れて、活動の幅を広げられるようにしました。

学生の底力を感じた瞬間 | ダミアン・ジャレの訪日が確定して から、メンバーの士気がさらに上がったように感じました。彼ら /彼女らが自主的に行動し、プロジェクトにおける新たな手法、 素材の開発に取り組むことができました。

今年度のプロジェクトから導かれる1冊 | エマヌエーレ・コッ チャ著『植物の生の哲学:混合の形而上学』。コロナ禍におけ る、人類の新たな哲学や感性を考える上で重要だと考えて います。

> 淀川テクニック!プロジェクト ^{ディレクタ−} 柴田英昭(淀川テクニック) ^{参加学生} 12人

20年度の活動テーマ | 淀テクグッズをつくることで淀川テク ニックの活動を感じてもらうこと。また、ウルトラファクトリー の機材を活用することで、プロジェクト終了後も使えるスキル を得ること。

今年度ならではの工夫 | 最初にオンラインでいくつかの ワークショップを行なって、メンバー同士の理解を深めよう としました。

学生の底力を感じた瞬間 | 3つのグループに分かれて作業し ましたが、手間のかかるグッズ制作にはグループ分けを越え て助け合っていました。

今年度のプロジェクトから導かれる1冊 | 藤原辰史『分解の哲学 腐敗と発酵をめぐる思考』。いつか淀川テクニックの手法や ワークショップを言語化するなら、この方に頼みたい。

BYEDIT ^{ティレクター} 多田智美(編集者/MUESUM)、竹内厚(編集者 /Re:S) ^{参加学生} 14人

20年度の活動テーマ | 例年、みんなで集まっての編集会議を 活動のベースにしてきたが、今年度はオンラインならではの 会議や取材のやり方を模索。といって、ネット技術に精通する という方向ではなく、編集的な知恵でどこまで快適なオンライ ンが可能かを探ることにした。

今年度ならではの工夫 | 時間の区切りが曖昧になることを懸 念して、2時間の活動時間内の時間割を事前に決めるだけでな く、各プログラム名をテレビ番組のように名付けるとともに、そ れを記す番組表フォーマットを制作。そのデザイン依頼もオン ライン上で行なった。また、学生が順に発表するときには一斉 にチャットに質問を投げ入れたり、ゲスト参加のときにはあえ て画面越しのフリップに手書きで質問を見せることも試みた。









MAWAII TRIBE SESSION

今年度のプロジェクトから導かれる1冊 | 茂山逸平『風姿和伝 ペペの狂言はじめの一歩』。茂山家の雰囲気を知るのに参考 になりました。 学生の底力を感じた瞬間 | 夏休みの期間、学生ひとりずつが パーソナリティを務めるかたちで3分間のネットラジオ (番組 名は「エディのカップラーメンタイマー」)を収録・公開しても らっていたが、それぞれの個性のもと、話の内容を考えてアイ デアを盛り込んだ、聴ける番組内容になっていた。

今年度のプロジェクトから導かれる1冊 | 『オンラインの馬鹿野 郎!!」。漫画、短歌、写真など、参加学生が1記事ずつ担当して制 作したZINE。





施設概要

名称 | ウルトラファクトリー 所在地 | 京都芸術大学 至誠館2F、3F、4Fおよび人間館B2 開館時間 | 14:30–19:30 (火–金)、10:30–17:30 (土) 休館日 | 日曜日・月曜日・祝日

構成 | S41工房 (至誠館4F):データ作成 (2D/3Dモデリン グ)、デジタル加工、工作・組立(簡易木工・真空成型・電気窯)、 塗装、撮影、大型印刷、ミーティングエリア、キッチン、オフィス S32工房(至誠館3F):シルクスクリーン、銅版画ドライポイン ト|S21工房(至誠館2F):金属加工・溶接、プラスチック成型、 スプレー塗装スペース、大型造形 | NAO21工房(人間館 B2F):木材加工、製材、CNC加工、木彫 主な設備 | レーザー加工機 / 3Dプリンター / UVプリンター / 大判プリンター / デジタル刺繍ミシン / カッティングプロッター / デジタルシルク製版機 / 3Dスキャナー / マシニングセンタ / 真空成型機 / シルクスクリーン関連機材 / TIG熔接機 / 半自動 熔接機 / プラズマ切断機 / 旋盤 / フライス盤 / コンターマシン / バイブロシャー / シャーリング / カーボンヒーター / ウォー ターブース/門型クレーン/手押し鉋盤/自動鉋盤/昇降盤/ 横切り盤 / ボール盤 / パネルソー / バンドソー / ユニバーサ ルサンダー / 角のみ盤 / CNCミリングマシン

Outline of the facility Name | ULTRA FACTORY Location | KYOTO UNIVERSITY OF THE ARTS / SHISEIKAN (2F-4F) and NINGENKAN (B2F) Opening hours | 14:30-19:30 (Tue.-Fri.), 10:30-17:30 (Sat.) Closed | Sunday, Monday, and National Holidays Contents | SHISEIKAN S21 studio: Metal Fabrication, Welding, Engineering, Plastics processing (Resin processing), Spray Painting, Lager scale construction | S32 studio: Screen Printing, Drypoint | S41 studio: Digital Modeling and Fabrication, Assembly Area, Paint Booth, Photographing, Large-format inkjet Printing, Meeting Area, Kitchen, Office | NINGENKAN NA021 studio: Wood Workshoip, Wood Cutting, Fabrication, CNC processing Main equipment | Laser cutting machine / 3D Printer / UV Printer / Large-scale Printer / Digital embroidery sewing machine / Cutting plotter / Fast Screen Tracer / 3D Scanner / Machining center / Vacuum Former / Equipment of Screen printing & Drypoint / TIG welding / Semi-automatic welding / Plasma cutting system / Lathe / Milling machine / Contour machine / Vibero shear / Shirring machine / Carbon heater / Water booth / Gantry crane / Thickness planer / Jointer / Tabele saw / Drilling machine / Panel saw / Band saw / Universal sander / Chisel mortiser / CNC Milling machine

10 projects were carried out this year at Ultra Factory. We asked four questions to each of the directors.

Virtual x Real Sculpture Project Director YANOBE Kenji (Artist) Participating students 13

What was the theme of the 2020 Project? | We put all our efforts into it as it was an opportunity to experiment with how artistic expression can be applied in a new lifestyle and to practice it. Specifically, we searched for new forms of expression that utilize digital techniques (CG modeling, VR, AR).

What were some new initiatives incorporated in 2020? Although regional art events were cancelled one after another, it was decided that I would join "Fukushima Triennale 2020" which was still being held. I then immediately made the unprecedented announcement, "I'll build an art festival in Shirakawa without visiting there even once." After repeated online meetings with students and the Triennale Executive Committee, the idea to make a video work showing a combination of the local hero Dharuriser and my work, "Komainu". We had a group of students who were proficient with digital software assembled, so the project developed through online meetings where senior students would teach their juniors. In the end, an AR sculpture was exhibited in Shirakawa.

What was a moment when you saw the potential of students? | It was a big help that 3rd year student Ono Hirokazu became the Teaching Assistant and formed a group with classmates who could use digital software and supported the project. He was invaluable to me as someone who isn't really good at digital software. Whether or not the "Sun Child" Fukushima project, which Ono joined in first year, was accepted or not was a chance for him to learn the difficulties of connecting art to society. The fact that he was resolved to join the Fukushima project this time too came from a strong will and sense of responsibility, which made me realize how much he matured.

What is a book you recommend related to this year's project? | It's hard to choose one during this ongoing struggle with reality. But I'd like this year's experience made into a book (laugh).

The Projected Image Laboratory (P-Lab) Director YAMASHIRO Daisuke (Artist) Participating students 9

What was the theme of the 2020 Project? | This was a project to think about how to connect my field of video media to society. As society suddenly went online, we had to change the way we communicate, with video complementing face-to-face communication. In that way, the theme of this project was to carry out the project while considering how to use video media together with the students.

What were some new initiatives incorporated in 2020? | The students learned various skills such as video editing, animation applications, and how to broadcast one's work.

What was a moment when you saw the potential of students? | To practice broadcasting, together in pairs the students came up with a video in which they appeared and continually broadcasted from 10pm for six days. One was an escape show where the program ended once the participants could escape. It was expected to last 20 minutes but instead it went on for 3 hours. In the end they wanted to just give up. It was exhausting for both the participants and the viewers.

What was the theme of the 2020 Project? | It was planned that the students would be engaged in a wide-range of artist activities such as helping to photograph a fruit farm in Fukushima, researching and making outdoor theater facility in Tokyo, but we had no choice but change the course of action.

What were some new initiatives incorporated in 2020? In the spring semester we had weekly online readings where each student introduced a full-length book. From the book they chose, they then wrote an essay about how to exhibit it as a site-specific work.

What was a moment when you saw the potential of students? | In October, when the rate of infection was easing, I invited the novelist So Kurokawa for a panel discussion at Theatre E9 in Kyoto's Minami-ku ward. Under the orders of the director, the students carried out detailed duties such as ushering, venue announcements, and Covid-19 countermeasures.

What is a book you recommend related to this year's project? | Books such as "Kokkyo" and "Ansatsushatachi" by Kurokawa Sou. He talks about the literature, taken from a massive amount of resources, that is born at borders between nation then forgotten. Another is James Shapiro's "1606: William Shakespeare and the Year of Lear" where he discusses the "pandemic and theater closures," during the James period in Britain, how the plague influenced the stage and what we can learn for the future.

kumagusuku

Director YAZU Yoshitaka (Artist, Director of Kumagusuku) Participating students 14

What was the theme of the 2020 Project? | The theme was creating a sustainable framework through thinking of issues of waste in art in the student's daily lives as well as operating a secondhand shop.

What were some new initiatives incorporated in 2020? | We made kits with assorted materials to process secondhand goods in order to actually work and think at the same time even online. By making and sharing how-to videos, the students could easily carry out their work.

What was a moment when you saw the potential of students? | It was when the students deepened their investigative perspective by researching DIY situations in Kameoka city.

What is a book you recommend related to this year's project? | Oka Keisuke, the designer of what we can say is an extreme example of DIY the Arimastuton Building, published a book called "Baberu! Jiryoku de BiruwoTateru Otoko" where you can feel the fundamental meaning of making things, as well as the madness related to it. It makes us think about the meaning of living and making things.

COLORFUL LAB. Online Project Director MASUDA Sebastian (Artist) Participating students 14

What was the theme of the 2020 Project? | In order for the next generation to survive in the future, we asked the students to image where the Japanese concept of "kawaii (cuteness)" came from, and this project was started seeing it not as a transient phenomenon but in

What is a book you recommend related to this year's project? | Ito Asa's "Te no Rinri". It talks about how we can't forget that no matter what medium you use to communicate, in the end it's our flesh-and-blood that receives the message. I really felt more through this book that video is just a complementary medium.

> Yanagi Miwa Theater Project Director YANAGI Miwa (Performer, Artist) Participating students 8

order to establish it as concept and philosophy.

What were some new initiatives incorporated in 2020? | This year, discussion and research was mainly carried out online, with the final results presented in an exhibition. One group researched the kawaii trends that have continued since WWII, while another group communicated with kawaii communities and media around the world. Through Kawaii, we reached the conclusion of "digital tribe," the way of a new contemporary community. From this, we built a hypothesis that could be hints for the next generation, and we presented them in an exhibition.

What was a moment when you saw the potential of students? | When the students and I first met in September, there was shared sense about the students of "an anxiety for the future". At the same time, by researching kawaii culture around the world, the students felt the power and creativity of others of the same generation. This was exciting for them. By communicating with others around the world about a shared culture they love, we felt this will be a hint for them to survive in the future.

What is a book you recommend related to this year's project? | "Mapping It Out: An Alternative Atlas of Contemporary Cartographies" edited by Hans Ulrich Obrist. We read this book the basis of the idea of what a world map of kawaii culture is about in digital tribes.

MILESTONES

Director HOSOO Masao (President & CEO, Hosoo Co., Ltd.) Participating students 16

What was the theme of the 2020 Project? | This project continued the digital archiving of obi designs. Amid Covid-19, we also had the goal of creating a new platform by using Instagram.

What were some new initiatives incorporated in 2020? |When each student gave online presentations on their plans, it allowed for better brainstorming so I feel it was a positive change. I think we made a positive example for remote communication and information sharing.

What was a moment when you saw the potential of students? | The project was student-centered so they took initiative to make the project structure. Of course, they led the work on archiving, Instagram ideas, and the launch.

What is a book you recommend related to this year's project? | "Aisuru Wamoyo" by Fuji Eriko (writer) and Mizuno Keiji (supervisor). Here you learn that designs can reflect many things such as seasons and time periods. This is a resource whereby knowing how designs can lead to new developments and they can be interpreted in various ways.

> Nipponga Byobu Project 2020 Director YAMAMOTO Taro (Nipponga artist Participating students 4

What was the theme of the 2020 Project? | The aim was to create a large-scale folding screen – from painting it to a stage where it can be presented.

What were some new initiatives incorporated in 2020? | Most of my works are done with analog materials, so carrying out this project online was a challenge for me personally. I've itemized our initiatives as follows: 1. Quickly changing to a project where online creation was possible. We had the "T-shirt Design Project" with Shigeyama Kyogenkai and Nipponga in the spring semester, while the fall semester had the "Mask Design Project" with Shigeyama Ippei. 2. It was important to make it easy to participate such as having the kickoff meeting as an online tea party. 3. Making chances to meet such as having a weekly online meeting. 4. Setting small goals for weekly meetings and adjusting the schedule if they are not met and sharing it with all members.

What was a moment when you saw the potential of students? | Although it was an online project, we were able to make a good result. For me, it was interesting that an international student joined online from Germany in the spring semester. Also, in collaboration with the spring project, students and I appeared together on Shigeyama Kyogenkai's YouTube channel.

experiments for the new performance called "Planet [wanderer]".

What were some new initiatives incorporated in 2020? | For the spring semester, we made arrangements so that students could do research and planning that can be done online. However, feeling the difficulties of operating online only, we asked the students to come to Sandwich for the fall semester to feel the studio's atmosphere and materials thereby expanding their activities.

What was a moment when you saw the potential of students? | After setting the date when Damien Jalet would visit, I feel the team morale really improved. The students took initiative to move the project forward, devising new methods and developing new materials.

What is a book you recommend related to this year's project? | Emanuele Coccia's "The Life of Plants: A Metaphysics of Mixture". I think it's important during this pandemic in consideration of a new philosophy and sensibility of humans.

Vodogawa Technique! Project Director SHIBATA Hideaki (Yodogawa Technique) Participating students 12

What was the theme of the 2020 Project? | We hoped the students could feel Yodogawa Technique's activities by making Yodogawa Technique goods. Also, by having the students use machinery at Ultra Factory, they can use those skills even after the project is finished.

What were some new initiatives incorporated in 2020? |We carried out a few online workshops to have the project members get to know each other more.

What was a moment when you saw the potential of students? | The students worked in three groups and each helped each other when it took time to make the goods.

What is a book you recommend related to this year's project? | Fujihara Tatsushi's "Bunkai no Tetsugaku: Fuhai to Hakko wo Meguru Shiko" When the time comes when I want to put Yodogawa Technique into words, I'd like to ask this author.

BYEDIT

Director TADA Tomomi (Editor, Muesum), TAKEUCHI Atsushi (Editor, Re:S) Participating students 14

What was the theme of the 2020 Project? | Usually each year our activities are based on editing meetings, but this year we had to experiment with online meetings and interviewing. But we didn't want to focus on being experts on Internet technology but rather see how much more comfortably we could do things online with editing wisdom.

What were some new initiatives incorporated in 2020? | Concerned that the time division would be ambiguous, we decided the timetable within the two-hour activity time in advance, as well as named each program like a TV show. We then made a schedule format like a TV program schedule to describe them. The design request was also made online. Also, we all wrote questions on the meeting chat for student presentations, and dared to show hand-written questions on placards through the screen for guest interviews.









What is a book you recommend related to this year's project? | Shigeyama Ippei's "Fushiwaden: Pepe no Kyogen Hajime no Ippo". This added to my knowledge of the Shigeyama school of Kyogen.

> ULTRA SANDWICH PROJECT Director NAWA Kohei (Sculptor) Participating students 8

What was the theme of the 2020 Project? | In collaboration with Damien Jalet, our main activity goal was for the students to research and join

What was a moment when you saw the potential of students? | During the summer holiday, each student recorded a 3-minute radio segment as a personality (program name was Eddie's Cup Ramen Timer) and presented it. It was worth listening to each of their unique personalities and program ideas.

What is a book you recommend related to this year's project? | "Online no Bakayaro!!" This is a zine featuring works by participating students such as manga, tanka, and photographs.

